28F-pm02

地域特産果樹を活用した生薬国産化研究：シテイ(KAKI CALYX)の基原と使用動向

○楠木 歩美[1], 高浦(島田) 佳代子[1,2], 浅尾 浩史[3,4], 辻本 誠幸[3,4], 辻元 康人[5], 後藤 一寿[6], 高橋 京子[1,2] ([1]阪大院薬, [2]阪大博, [3]奈良農研セ, [4]奈良果薬セ, [5]奈良県医療政策部, [6]農研機構)

【目的】シテイ(柿蒂：KAKI CALYX)は日本薬局方外生薬規格にカキノキ *Diospyros kaki* Thunberg の成熟した果実の宿存がくと定義される吃逆(シャックリ)の要薬だが、現在すべて中国からの輸入である。奈良県は全国 2 位の柿生産量を誇るが、薬用生産は皆無である。そこで、地域特産果樹で食用と薬用部位が異なる循環型活用と篤農技術の蓄積による生産性に着目し、柿蒂の基原並びに奈良県医療機関における柿蒂の使用動向の把握を目的とした。**【材料・方法】**柿蒂市場流通品(8 検体)及び奈良県果樹・薬草研究センター保有遺伝資源 13 種を対象とした。比較資料として阪大所蔵の中尾万三・木村康一蒐集標本、津村研究所製和漢薬標本を用いた。形状、重量及び外部形態は、デジタルノギス、電子天秤、デジタルマイクロスコープで解析した。また、奈良県内医療施設に対し、柿蒂関連医薬品使用の有無をアンケート調査した。**【結果・考察】**2014 年収集市場品のうち、原形生薬 (3 検体)は 1 個あたり重量 0.4-0.9g、径 1.5-3.0cm、中央部はやや厚く皿状を呈し、ほぼ正方形で大半ががく片を欠く。一方で生薬標本類及び 1980 年以前の市場品には周辺に 4 裂するがく片が特徴的に残存していた。近世・近代において、柿蒂に関する薬物名として柿蔕(蒂/銭)で 32 種、柿蔕(蒂/銭)散で 8 種、柿蔕(蒂)湯で 19 種、柿蔕二陳湯は 3 種の書物に記載を認めたが、性状の記載は乏しい。奈良県産柿の年間総生産量は約 3 万 t で、流通量の多い栽培種(*D. kaki* 類)は富有(45%)、刀根早生(29%)等である。柿蒂の使用ニーズについては、県内約 70 ヶ所の医療機関で調査中だが、現在、回答施設の約 40%で柿蒂湯(柿蒂、丁子、生姜)または柿蒂単体での使用実績があり、継続した需要が示唆される。今後、県内栽培種を活用した生薬柿蒂生産の実践に向けて、品質面での系統比較を予定している。